

へき地教育へ思いを馳せて

中部教育事務所 指導主事 有田 雅代

へき地教育という言葉から、私が想起するものが3つある。本稿では、この3つを通してへき地教育への思いを綴っていきたい。

1 幼少期を振り返って

私は0歳から3歳までの3年間で、都城市立御池小学校の教職員住宅で過ごした。小学校教員だった父親が御池小学校で勤務することになったからだ。今でもふとした瞬間に頭によぎる物心がつく頃の最初の記憶が、御池での生活であった。教職員住宅の隣に住んでいらしゃった校長先生ご夫婦に可愛がってもらったこと、住宅の狭い部屋の父親の机のそばにあったガリ版で、夜中に父が何かしらを刷っていたこと、毎週決まった曜日に移動販売車が音楽を流しながら来ていたことなどを覚えている。

特に鮮明に覚えているのが、父の教え子とその保護者と一緒に過ごしたことだ。当時は、御池は冬になると雪が積もった。昔のアルバムを見ても少なくとも5センチは積もっている。辺り一面真っ白の中、父の教え子と一緒に遊んでいる写真がある。父を訪ねてきたお兄さん、お姉さんと当時飼っていた犬のコロと雪合戦をしたときの風景を写真のように思い出すことができる。

その他にも保護者の方が夕方に住宅を訪ねてきて竹の子などのその時々旬の野菜を届けてくれたり、地域の方と一緒に風呂沸かし用の焚き物を裏山で拾ったり、秋季大運動会を町民全員で行ったりした。地域住民の生活と教職員の生活、学校が密接に結びついていた。教員となった今、当時を振り返ると私自身の学校の在り方の根底にこの原風景があることに気付いた。

2 やまびこ文庫事業を担当して

へき地教育に関わるようになったのは、平成31年4月から県立図書館で「やまびこ文庫事業」の担当になってからである。やまびこ文庫事業とは、山間部等の県立図書館から遠く離れた地域に対して重点的なサービスを行い、県内一円の読書活動推進を図ることを目的としている。昭和29年に開始し、68年続いている歴史の長い事業であり、本県の文化振興の役割も担っていた。

事業開始当時の移動図書館車「やまびこ号」には本だけではなく、レコードや映写機が積み込まれ、各地域で音楽会や映写会を行っていた様子が写真や16ミリフィルムの映像で残っている。やまびこ号の到着を今か今かと待ち、到着に歓喜し、やまびこ号に積まれた本を我先にと手に取る姿や、音楽会や映写会の盛況な様子を映像で見ると、へき地教育の原点を垣間見て厳粛な気持ちになるとともに、担当職務の重要性を再認識した。

令和4年現在は、移動図書館車「やまびこ号」は引退し、へき地の学校や公共図書館に県立図書館の本を運送会社を通して配送する方法が変わっているが、目的は変わらない。事業担当者として、へき地の学校の子どもたちや住民を思い浮かべながら、何万冊もの本を選書した。それらの本が各地域の公共図書館や学校に並び、住民の方々や子どもたちが本を借りていく様子を実際に見る機会があった。住民の方々や子どもたちの読書活動推進だけでなく、各地域の文化振興の一助になっていることを実感しとても感慨深かった。

3 複式を有する小規模校を訪問して

現在は、中部教育事務所教育推進課南那珂地区教育推進担当として、南那珂地区の学校を訪問する機会をいただいている。南那珂地区には複式学級を有する小規模校がある。これらの学校を訪問して共通して感じることは、地域の特色を生かしたきめ細かな指導が行われているということだ。それぞれの地域の特色を生かした教育課程や地域人材を活用した授業は、子どもたちにこれからの世の中を生き抜く力を身に付けさせるとともに、ふるさとを愛する心を養うことができる。また、子どもたちと教員たちの密接な関係の中、少人数で学ぶよさを生かした指導を先生方が行っている。このように、社会に開かれた教育課程のもと、自然に学校、地域、保護者が連携して学校教育が行われている。

「へき地教育は教育の原点である」といわれる。豊かな自然の中で、生活そのものの中で子どもと保護者と密接に関わり、学校と地域が共に学校をつくり上げていく。それは子どもを育てるだけでなく、地域を育てることであり、社会に開かれた教育課程が具現化した姿であろう。